① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第14巻　第6号　1969年6月25日　大町山岳博物館

大町山博で生まれたニホンザルの赤ちゃん（生後32日目）　　撮影（5月31日）平林国男

子ザルのたわごと

『私が生まれたのは四月二九日、天皇誕生日にあたる祝日の日でした。ちょうどこの頃人間社会ではゴールデンウィークとかいう連休続きで、そのうえ、春の遅い北アルプス麓の大町市では桜の花が満開の季節でした。

この間、桜祭りと名うつ行事がつぎつぎ催され、狭い庭に灯されたボンボリ、仮設の売店、満開の桜、桜の下で杯をくみかわす人の波と、博物館の周囲は日頃とはうって変った様相となりました。

私を生み落した母親は、しばらく私を見守り、抱きかかえてくれましたが、周囲でざわめくする人の声、しゃへいしたムシロの透き間からのぞき込む人の姿、あるいは飼育舎の横をほこりを巻き上げて走り去る自動車の音にどうしても落ち着きませんでした。

催し物が始まる合図のために打上げられた花火のごう音に驚いた母親は、あわてて私を床の上にほうりつけ奥の部屋に飛びこみ、小さい出入口から恐る恐るのぞいて見るだけで私のそばへ来てくれません。

こうして身近に母親がいながら、ついに完全な捨て子になってしまいました。

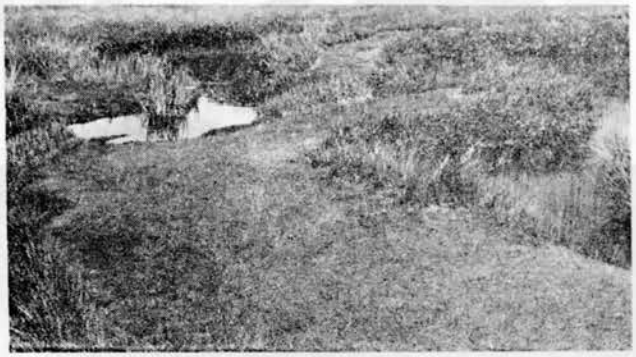
人の手に拾い上げられた私は、暖房とミルクでかろうじて命をつなぎ、離乳期近い現在まで立派に生長することができました。

しかし、私は不思議でなりません。人間はどうして騒々しい、狭く、ほこりっぽい環境の中でストレスを起さずに生活できるのでしょう。生物学的には私どもと非常に近い仲間に入るといわれます、私どもは俗にいわれる〃毛が三本たりない〃ためすぐ駄目になるのでしょうか。

私は、限られた敷地の中につぎつぎと新らしい施設がつくられてゆく、狭くせせこましい環境ではなく、多少の人々が押しかけても過密にならない程度の、ゆったりした緑の木陰の多い静かな環境に住ませていただきたいと考えています。』　（山猿）

自然の保護と植生図

宮脇　昭



湿原は弱い景観で、人が踏むだけでも植生は破壊されて裸地化する（尾瀬ケ原）

1 自然保護とは

最近自然保護の問題が新聞紙上でも話題になってきた。とくに山地での自動車道路、ロープウエイの建設や観光開発計画に対してはきまって、その計画に反対するいわゆる〃自然保護運動〃が地元やどこかの団体などで必ずといってよいほど始まる。

十年ほど前まではこの様な開発に反対する小さな運動が、たとえどこかで起っても、開発側は、地元民、あるいは県民、さらに国民を豊かにするためには、産業開発、宅地開発あるいは観光開発は良いことであると強行されるのが常であった。

その結果は、海岸の埋立地から高山の自動車道路、観光施設の増加にいたるまで、折角その景色―景観―を売物にしていた自然の緑は破壊され、鳥も少くなり、人工物だけが残っている様なみじめな景観になってきた。さらには、当然十年に一回あるいは数十年に一回程度の間隔で定期的におそってくる中程度の大雨や大風にも思わぬ人命事故までひきおこす惨事が各地に見られる様になり、人間が自分たちの富と楽な生活をかちとるためと考えて行なった〃開発行為〃は、結果的には人間の不幸をもたらすことになった。

高山峡谷にめぐまれた長野県などで地元民に少しでも豊かな生活を保証するためにと、華やかなキャッチフレーズによって行なわれる観光開発でも、それが、土地固有の自然の美しさが十分理解されず、科学的立場に立った自然の診断が行われず、単に経済ベースにもとずく〃技術〃だけで画一的に強行される場合は、地元民への実質的な還元がほとんどないことが多い。そのかわりに騒音、汚染に色づけられた郷土の自然の喪失、災害の危険性などマイナスの面だけが残される。

これでは誰れのための、何のための開発かわからなくなってしまう。一方、自然を守る側も、単に花がきれいだから、鳥が可愛いからという審美的、情緒的な面からだけの自然保護運動では、物質本位、機能本位の現代の産業や開発に対応できなくなってきた。

ヨーロッパ各国の自然保護運動の歴史を見ればわかる様に、百年近い時間の流れの間にいろいろな人たちの色々な自然観、自然保護に対する考え方があった。これは当然のことで、それほど自然は多様であり、人間生活も含めた自然現象は、決して画一的な手法で整理することも理解することもできない。

現代の急速な都市周辺の産業開発、宅地開発、山間地や山岳地帯の観光開発は、もはや単に自然を破壊するだけでなく、我々人間生活の基盤まで危くしている。それは、多様な自然に対する画一的な開発による自然のバランスの破壊である。

高木、亜高木、低木、草本、コケ植物などの色々な種類のいろいろな大きさの植物が、たがいに競争し、我慢しあいながらも共存し生活の場をすみわけて一つの動的平衡状態を持続しているブナ林などの自然林と、自然林を皆代して、画一的に植林されたカラマツ林などの人工林を比較してみると、自然林がいかに暴風雨、病害虫などの外的干渉に対して強い抵抗力をもっているかがわかる。

これは、もとより、我々がすぐ見ることができる高木や低木など外見だけのちがいではなく。土の中の小動物や微生物にいたるまで自然林では、すべての生物が機能的、社会的に相互に有機的に関連しあいながら調和のとれた生活をしているためである。

我々人間が、万物の霊長といわれ、威張っても、他の動物、植物、さらに微生物が、この地球上から失われたとしたら一時も生存できないはずである。多様な自然の中で、直接間接に影響しあいながらも他の生物、とくに緑の植物との共存の中にのみ、我々人類の発展は期待できる。

2 これからの自然保護

新しい自然保護、現代の自然保護とは、植物や虫のためではなく、まさしく、あなた自身のため、わたし自身のためである。自然は強い復元能力、バランスのひずみをもどす能力をもっている。したがって、少々人間が、山肌をけづったり、川をせきとめたりしたくらいで駄目になるものではない。少し長い時間で見ると、自然自体の強い復元能力で、再び緑の自然を復元することもできるだろう。ただその前に肝心の人間が衰退したり、亡びる危険性がある。我々が、わずかの富を蓄積し、便利な生活が一時的にできたとしても、生活環境が悪化したり、不慮の災害によって死んでしまったのでは意味がない。

現代の自然保護運動、それは、我々の最低限の生活の基盤の確保である。

3 強い自然と弱い自然

よく極端な意見を聞く。〃何んでも自然保護をするのであれば、道路も工場も観光施設も一切つくらなければよいのか。それでは生きてゆけなくなるのではないか。自然林は伐ってはいけない。宅地造成もしてはいけないでは、住むところも、生活することもできなくなるではないか。〃その通りである。我々は生きてゆくためには、森も伐らなければならない。産業開発、観光開発もやらなければならない。

ただどこでも画一的に開発するところに問題がある。自然は多様である。したがって、人間が、少々開発してもそれほど影響のでない強い自然と、一度自動車道路をつけたり、森林を皆伐したりするとなかなか復元しないばかりでなく、山崩れ、洪水などの災害までもたらす弱い自然とがある。このちがいは自分の顔を指で突いて試してみると誰でもわかる。

どんなに文明が発達しても、我々人間も自然の一員であるという枠から抜け出せない。

スバルライン沿いに森林破壊がなおつづいてる弱い景観（富士山北斜面海抜二一〇〇M付近のシラビソ林）

このことは、生まれたら道ばたの雑草や虫とおなじ様に大きくなって老衰し、やがて死すという冷厳な事実の一つをとってみても認めざるを得ない。その生きている自然物の一例としての自分のほほを指で突つくと痛いが別に怪我はしない。ところが、ほほから段々上の方に突いていって、もし指が眼の中に入ると、一突きで盲（めくら）になるかもしれない。

我々が、どこでもおなじ山や川と考えている自然にも 古くから耕地化して、人家のある様な、人間の顔のほほにあたる強い自然と一度破壊すると容易に復元しない弱い自然とがある。数百年の昔から長い時間をかけて試行錯誤的に行なわれてきた農村開発などは、経験的にひかくてき強い自然―または景観―しか利用されていない。

現在観光開発などの対象になっている高山や峡谷などの残されている自然の多くは、人間の眼にあたる弱い景観が多い。そこへ、今まで開発されてきた低地の強い景観域とおなじ様な手法で、画一的な開発が行なわれるとそれは、そのまま自然破壊につながる危険性がある。

4 自然診断図としての植生図

今までの様に開発が数百年以上の長い時間をかけて漸進的に行なわれる際、もし間違った開発によって被害がでても大事にならないうちに経験的に避けられる。しかし、現在では、人間は自然が数百年あるいは数千年かけてやっとなしとげた様な大規模な地形変化でもわずか数年でなしとげ。したがって、弱い自然に対して短時間に大きな干渉を行なった場合には、単にその景観が破壊されるばかりでなく、予期できないような惨害を招くことになる。

この場合、もはや過去の経験だけでは不十分である。科学的な立場に立っての自然診断を行ない、立地や自然の強弱をまず見分ける必要がある。そして、弱い自然はできるだけ現状のまゝで、観光資源などとして残すことが大切となる。自然界では、美しいものは一般に弱い。したがって、景勝地といわれ、観光資本からねらわれている様な景観域の保護と開発に際しては、できるだけ、きめの細い具体的な自然診断が必要になってくる。

自然診断にも環境条件を調べる方法、動物を調査する方法などいろいろな方法があり、それぞれ一面的な成果は期待できる。しかしも一我々が宅地、産業用地、観光地として利用しようとする場合には、生き物の側からの立地診断がもっとも重要になる。人間かあるいは動物が、人間に近くて環境診断にもっとも有効に使えそうである。しかし、人や動物はいやなら逃げだすが、植物は、そこにおかれた種子は、生命（いのち）をかけて、そこで生育しようとする。そこの環境条件に耐えてしかも他の植物とのきびしい競争に我まんできた種類や個体が集って、その場所―立地―固有の植物群落―社会―を形成している。

この様にして生きている植物群落の具体的配分は、実にごまかしのない、その立地の環境条件の総和を生き物の側から具現したものである。したがって、自然診断の質的な決めてとしては、植物群落がもっとも使い易いことになる。動物、人間も、植物群落との関係で、そこでの生活条件が変り、植物群落はすべての生物の生存の基盤となっている。植物群落の具体的配分を地図上に描いたものが植生図（Vegetation map）と呼ばれる。現在広く世界各国で賢明な自然の利用と保護の基礎図として、植生図が広く利用されている。

高山などの様に今までほとんど人間が自然を破壊しなかった原始景観域では、現存植生の配分を具体的に地図上に描いた現存植生図は、そのまま、その立地のポテンシャルな植生力を表現した潜在自然植生図でもある。しかし、植林地、農耕地などの様に様々な人間の影響下にある人為植生域では、現存植生はその立地の環境条件の総和プラス人為的影響に与えられた、その立地本来の自然植生の代償植生といえる。

その立地を再開発したり、自然復元しようとする場合に、代償植生域では、現存植生図の他に潜在自然植生図の作製が必要になってくる。潜在自然植生図は、今人間の影響を一切停止したらその立地は本来どの様な自然植生を支え得るポテンシャルな能力をもっているかを地図上に描いたものである。

潜在自然植生図の必要性は、いわば厚化粧している人に、新しい種類の化粧をしようとするときには、古い化粧の上にぬらないで、まずその人の素顔をたしかめてからその顔に応じて新しく化粧させるようなものである。今、下草刈りしながら無理にカラマツやヒノキを植林したり、耕してジャガイモをつくっている場所が、果してその土地本来のもっとも上手な利用法かどうかは、その土地固有のポテンシャルな植生力を確めて検討するのがもっとも理想的である。

自然域でも、すでに一定の人為的干渉下にある半自然植生景観域でも、まず自然の質的な強弱の差を十分おさえてから、どこは、どの程度の開発に耐え得るか、もっとも弱い眼にあたる景観はどこかを科学的に把握する。

開発に際しては、それぞれの立地の質に応じて行なう。また弱い景観は、きぜんとしてこれを保護しぬくだけの決意が必要である。

5 賢明な自然の利用と保護の調和

開発が人間の便利さのためであるならば、自然保護もまた人間の幸福と健全な生活を保証するためのものである。多くの場合に開発は目前の利潤を追求し、保護は資本を食いつぶさないで長期に亘る総合的な利潤の保証をねらったものといえる。したがって、両者は本来対立するものではなく、共存させなければならないものである。もっとも賢明な開発とは、自然、とくに弱い自然の保護を前提とするものである。自然保護は、霞を食うユートピアの国の仙人のたわごとではなく、現実に生きている人間の将来に亘る豊かな生活の保証のためである。したがって、科学的視野に立っての必要な開発を積極的に推進できる広い見方のできる自然保護家に日本人の大部分が早くなることを期待したい。

この様に開発と保護の調和が多くの市民に理解されたとき、節度のある我が国の開発が自然保護と共存できることであろう。

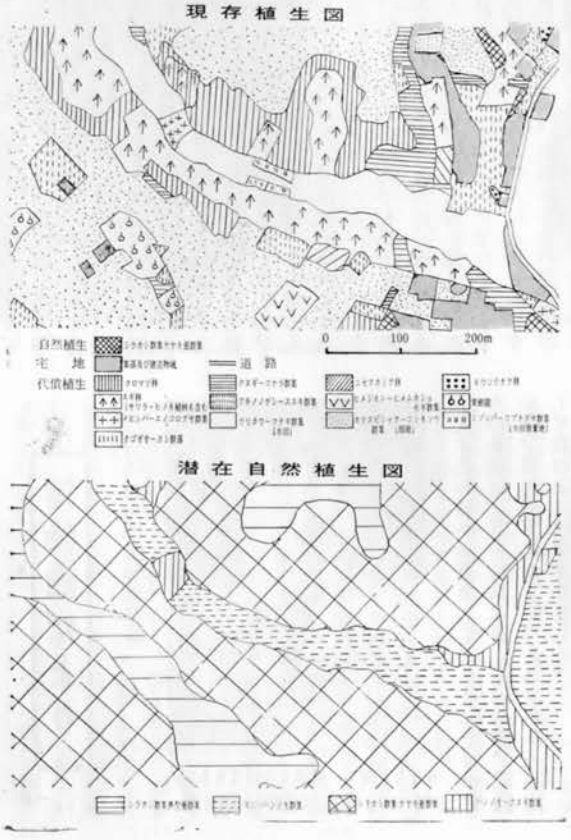
そして、自然の保護と開発の調和の基礎は自然診断図―植生図―によってはじめて可能であろう。

（横浜国立大学教授）

現存植生図と潜在自然植生図

適正開発を目ざして自然診断のため植生図が作成されている

（藤沢市西部現存植生図〔5,000分の1〕の一部）



百瀬慎太郎さんを偲ぶ

＝大町登山案内人組合と百瀬さん＝

平林武夫

大町を中心としていわゆる近代登山が発展しはじめたのは大正初期である。

当時は篠井線の明科駅から馬車で大町に至りこゝで登山準備の一切を整えて山にはいった訳である。

大町の鍛治屋が打った金剛杖。附近の農家で作ったわらじ、それに着ござ、桐油紙等が登山用具の主たるものであった。現在東京やナ陟の運動具店から卸して売っている登山用具のことを考えると感深いものがある。

こうした中で当時の登山者に一番要求されたものは山の案内人であった。

対山館の若主人であった百瀬慎太郎さんは家業の立場からもまた登山家としての立場からもこの大町口の案内人を如何ように配るかということには非常に頭をなやまれたようである。

当時の案内人組合のハッピ（大町山博所蔵）

〃信州大町が近来登山の中心点となり案内者の需要頗る多く、ためにこれが配給の当路たる大町対山館百瀬慎太郎氏は大いに見るところありて登山案内者組合を設立せり、氏は本会会員にして年々同地を通過する登山者のため少なからぬ厚意と便宜を与えられつつあり同氏の主張のもとに左記の如き規約によりて今夏より其設立をみたり日本に於て唯一にして最初なる登山案内者組合は斯くて生れたり吾人は百瀬氏のこの挙を満腔の喜びと同情を以て迎うるものなり。〃「（山岳）第十二巻一号」　この時大正六年六月

さてこの規約を一々こゝに列挙するわけにはいかないが、その規約全部をつらぬいている精神は「純朴にして善良なる山人の気風を重んじ不徳儀の行為のあるまじきこと」という第一条の精神である。そして最后の一条には「善良なる大町案内者の名実をあぐるよう心がくべきこと」とある。

当時のことは私の幼少の頃なので知る由もないが私が百瀬さんにお世話になってからもこの設立当時のお話もきゝ、又創立以来の案内人の幾人かとも心安くした。

伊藤菊十　大西又吉　勝野玉作　伝刀林蔵
黒岩直吉　松沢由蔵　佐藤静馬　松田茂一
吉沢永次郎　北沢清志　北沢儀一　宮坂広次　北沢定治　西沢浅一　神社栄太郎　宮坂義衛　柳沢国夫　福島今朝吉　西沢彰
平林広恵　鎌倉澄治　宮坂良助

この二十二名が創立当時の案内人組合員であった。これ等の案内人達は当時の北アルプスの開拓についても大きな功績を残した人達であり後世の岳人の育成につとめられたこともまた大きな功績であった。

案内人組合は夏ばかりでなく年に三、四回の会合を以て組合員相互の親睦をはかったようである。後年私はよくその会合に招かれたことがある。対山館の二階で皆楽しく呑むほどに酔うほどに山の手がら話に花が咲いた。

百瀬さんは役人嫌いであった。この案内人組合が何時頃であったか労働組合と間違えられて警察から問い正されたことがあったようである。いくら時代が時代でも登山案内人組合と、思想的背景をもった労働組合と間違えられたことは余程百瀬さんも腹に据えかねたようである。そんなことばかりでなくどうも警察や営林署のいわゆる役人肌とはしっくりしない性格であった。針の木小舎の敷地の借用期限の延長願の手続きのことで富山営林署へ出頭の催促があったがどうしても気が向かない、そうかと言ってそのまゝ捨ておく訳にも行かない百瀬さんは、遠慮しながら私に「おれのかわりに富山営林署へ行ってくれないか」とのことだった。私は早速引きうけて針の木黒部立山と山越をして富山営林署に出向いてどうやら代役を果したことがある。思えば三十余年も昔のことである。

百瀬さんは反面民主的というか一般の人達とはまことに屈たくない交わりをした。殊に前述の案内人の諸君とは見る目にもうらやましい位つき合っていた彼等と喜びや悲しみを分け合って交った。

或る時の組合の会合に招かれた折、例によって呑みかつ歌って時の過ぐるを忘れたのであるが、その折私は百瀬さんの越中小原節のあの山の哀調を含んだ唱を本当にしみ〴〵と聞き今でも私の耳のどこかに残っている。越中なまりの唱が

〃えっつうぢゃたつ山　加賀では白山、
しるがのふづ山三国いつだよ　キタサノサー
ドッコイショ〃　（大町山岳会々長）

博物館だより

◇カモシカの愛称きまる

すくすく育ち、名前をつけてもらった「和歌子」（撮影5月20日）磯村 修

先きに一般から募集しておりましたカモシカの名前は、応募数八六通（市内六三、県内一九、県外四）におよび、このうちから選定して次のようにきまりました。

A　長野県南安曇郡安曇村大白川地籍で保護されたもの『あつ子』

B　和歌山県新宮市那智山で保護されたもの『和歌子』

なお次の方々にはアルバムをお送りしました。（大町市）竹村いし子、玉井千晶、加蔵孝子、村越春美、西沢あい子、小沢礼子、（松本市）半田道子（穂高町）古畑ふじみ、（木曾郡大桑村）田中万寿子、（新潟県南魚沼郡湯沢町）剣持八郎（敬称略）

◇山博協議会委員きまる

昭和四四年度大町山岳博物館協議会委員は次の方々にお願いすることになりました。

近藤信、横沢茂、太田等子、洞沢昭三郎、久保田稔、横川豊、太田実、山岸左馬次、柴田吉麿、荒木荒重、北沢善一、藤巻磬、伊藤嘉美、宮下深、山本携拳、菅沢幸雄、宮田清福島融、武田武、下坂宣一（順不同、敬称略）

山と博物館第14巻第6号
発行所　長野県大町市　一九六九年六月二十五日発行　TEL大町②三二
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円（送料共）